

ロバート・フロストとホワイトマウンテンズ ——観光産業における「崇高」と「日常」の自然詩——

朝倉 さやか

1. はじめに

Robert Frost は 1874 年にサンフランシスコで生まれ、11 歳で父方の祖父母が暮らすニューイングランドにやってきた。39 歳の時に渡英し最初の詩集を上梓した後、1914 年に出版した第二詩集 *North of Boston* でニューハンプシャーの人々を描き、ニューイングランド詩人としての立場を確立した。フロストは人々の会話の中にあるリズムや抑揚を “sound of sense” と呼んで重視し、平易な日常の話し言葉を使って詩を書いた。

「ニューイングランド詩人」と呼ばれるフロストとニューイングランドの関係については、文学、文化学の双方からさまざまな研究がなされている。George Monteiro や Eliza New は Henry David Thoreau や Ralph Waldo Emerson らニューイングランド出身の作家たちとフロストの共通点を明らかにし、「ニューイングランド文学」の伝統の中にフロストを位置付けた。しかし「ニューイングランド文学」の定義の難しさについても指摘されてきた。例えば John Kemp が述べるように、ニューイングランド人のステレオタイプのキャラクターだけを見ても “plain, simple, down-to-earth folk” や “shrewd, devious, and unpredictable” (6) など多様だ。確かにニューイングランド性を定義する要素は作家の出身地や伝記的背景の他に、言葉、アクセント、主題、素材、登場人物の性格、社会状況など数多く存在するうえ、ニューイングランド内での地理的差異や時代による変化、作家の出身階級による経験の差異を考慮すると、「ニューイングランド性」を統一することは困難である。ニューイングランド内の文化的多様性への関心が高まった 2000 年以降、Maria Farland や Priscilla Paton は、ニューイングランド北部の農村地帯を離れた場所、退化した人々が暮らす場所と考えた 20 世紀初頭の社会学に注目し、フロスト作品をこのような社会学に対する抵抗と解釈した。これらの研究は、よりローカルな文脈にフロストの詩を置くことで、ニューイングランド詩人としてのフロストの特異性を明らかにすることに成功している。

ニューイングランドという合衆国の歴史的・文化的アイコンではなく特定の地域と事象に注目したファーランドらの研究に倣い、本論ではニューハンプシャー州の White Mountains という地域に着目する。フロスト作品の多くは彼が暮らしたニューハンプシャーやヴァーモントの農場を描いたと考えられてきた。舞台となった場所を具体的に特定できる作品は多くはないが、その中でホワイトマウンテンズ地域の町や山の名前が実際に言及されている。ホワイトマウンテンズは 1830 年代から観光地化が始まった地域で、文学者を含む多くの著名人が避暑に訪れた。同時に、作家や画家らがインスピレーションを求めてこの地を訪れ、ホワイトマウンテンズを題材とした作品を生み出し、その作品がまた観光客を呼び寄せた。Nathaniel Hawthorne も創作のためにホワイトマウンテンズを訪れた作家の 1 人だ。実際にフロストは、ホワイトマウンテンズの “the popular summer colony” (Sargent 667) として有名だった Sugar Hill の隣にある、Franconia という小さな村で 1915

年から1920年まで暮らした経験を持つ¹⁾。

ホワイトマウンテンズの観光産業は作家たちの活動を方向づけた。Marit MacArthur はフロストが当初は旅行者としてニューハンプシャーを訪れたことを指摘した上で、ニューイングランド的風景である“abandoned house”に注目し、イギリスロマン派の影響を明らかにした。本論はホワイトマウンテンズにまつわる観光産業と文学の緊密な関係性を考慮に入れることで、フロスト作品がいかに当時の商業詩、とりわけイギリスロマン派的自然描写の転換を試みたかを論じる。多くの詩人たちは崇高の概念を体現するような自然を題材に、イギリスロマン派的言語を用いて詩作を行うことで、観光地化が進むホワイトマウンテンズの宣伝活動に加わった。そういった伝統に抗うように、フロストは身近な領域にある自然を日常的言語で描いたのであった。

2. 「非日常」としてのホワイトマウンテンズ

アメリカ北東部のニューイングランド地方は、アメリカ建国の地として政治、経済の中心となり、主な産業だった酪農や農業に加えて、18世紀末からは製紙業、製材業が発達し世界有数の工業地帯を擁した。しかし19世紀後半になると開拓された西部や発展を遂げる都市部へと人が流れ、特にニューイングランド北部で人口減少が問題となる。そこでメイン州、ニューハンプシャー州、ヴァーモント州の北部3州は、経済対策として観光業に力を入れた。その中でニューハンプシャー州は、Old Home Week と呼ばれるイベントを町ごとに開催し、都市部へと流出した人々を呼び戻す取り組みを行う一方、州内北部のホワイトマウンテンズという山岳地帯の観光地化に一層注力した²⁾。ホワイトマウンテンズは「崇高」で「ピクチャレスク」な場所として、1830年代から本格的に観光地としての開発が始まった。「アメリカのアルプス」としての宣伝活動や鉄道網の発達相まってボストンやニューヨークなど都市部の人々を惹きつけ、19世紀末には1000人以上を収容する大型の高級ホテルが周辺に何棟も建てられた³⁾。

ホワイトマウンテンズ観光において、文学が果たした役割は大きい。景色のいい場所で詩を暗誦したり、詩作をすることがホワイトマウンテンズ観光では主なアクティビティであった。景色の崇高さを洗練された表現で讃えることがその人の社会的地位を証明するという風潮があったなかで、観光ガイドブックはそういった自然観および文学的感性の手本を示した⁴⁾。旅行者の活動に 대응して、“The definitive guidebook for the period” (Brown 52) と紹介される1859年初版のガイドブック、Thomas Starr King の *The White Hills: Their Legends, Landscape, and Poetry* には、その副題の通り、前書きで名前が挙げられるだけでも“Bryant, Emerson, Longfellow, Whittier, Lowell, and Percival”といったアメリカの文学者から“Wordsworth, Scott, Tennyson, Goethe, Shelley, and Byron” (viii) などイギリスロマン派まで、多くの詩人の作品が引用されている⁵⁾。これらの詩では、ホワイトマウンテンズの岩山の剥き出しで険しい様が“rugged” “rocky” “jagged” “craggy”などの単語で説明され、その“vast” “lofty” “glorious” “solemn” な様子から、山々は“heaven” “God” “eternity” といった宗教的概念と重ねられる。このように「崇高」な山々を前に、人間は“mortal”な存在として圧倒され、畏怖の感情を抱くもそれを言葉にすることはできない (“I had no words to tell the ming'ed thoughts / Of wonder and of joy that then came o'er me” (King 142))。そして山々を見上げる、もしくは山頂から見下ろす視点から遠景が描写され、人々の生活、個々の植物や木々など近景

が描かれることはほとんどない。さらに半世紀ほど後、1921年版の *A Handbook of New England* はハイウェイの発達に伴いニューイングランドの道路交通と各市町村の情報を網羅したガイドブックだが、その中にもトマス・キングの文章やロングフェローの詩の引用が見られ、1923年に出版された Wallace Nutting の *New Hampshire Beautiful* では、風景写真だけでなく、詩が合計17篇収録されている。これらの詩は、風景を見た人が何に注目しどのように感動すべきかを詳細にガイドするものであり、1920年代においても観光産業の中で詩が重要な役割を果たしていたことがわかる。観光ガイドブックは自然を崇高な概念と同一視し、畏怖の念を覚え、言葉で表現するためのガイドブックでもあった。

観光ガイドブックは観光地の見所だけでなく、その地をテーマにした詩作品が収録されるものであった。しかしこれらの詩の主題は自然描写やネイティブアメリカンにまつわる歴史、現地の伝承が中心で、地元住民の生活は描かれることなく周縁化されている⁶⁾。 *The White Hills* や *New Hampshire Beautiful* においても、引用された詩や本文中で焦点が当てられるのは観光資源となっている自然やネイティブアメリカンの伝説だ。このような慣習とは対照的に、観光地としてのホワイトマウンテンズを現地住民の姿を混じえて描き出したのがフロストだった。

3. 観光地の中の日常

・“The Mountain”

ホワイトマウンテンズを舞台にした文学作品が、観光客の視点から見た「崇高な自然」を主題とする傾向に反して、フロストは自らの作品に地元住人を書き込んだ。“The Mountain”と“A Fountain, a Bottle, a Donkey’s Ears and Some Books”では地元住人と旅行者の交流が中心に描かれている。これらの詩において地元住人は観光客の単なる添え物ではなく、観光客に自然の新たな見方を提示する存在となっている。

“The Mountain”では、ホワイトマウンテンズ地域を訪れた旅行者が、地元の老人と出くわし言葉を交わす。舞台となる Lunenburg という町は、“a famous view of the White Mountains” “The place is developing into a summer resort on account of the scenery and its proximity to White Mountain centers” (Sargent 404) とガイドブックで紹介される観光リゾート地だ。ホワイトマウンテンズでは、観光客はルネンバーグのようなりゾート地に滞在しつつ、山頂やホテルからの眺望を楽しんだ。しかし旅行者である語り手は、南東にあるホワイトマウンテンズではなく北西の Mount Hor に興味を向ける。地元の老人に登ったことがあるかと尋ねるが、老人にとってホー山は “Deer-hunting and trout-fishing” (45) など日常生活の場であり、わざわざ景色のために登山をすることはない。老人は山頂からの眺めの代わりに別の光景を旅行者に話す。

But what would interest you about the brook,
It's always cold in summer, warm in winter.
One of the great sights going is to see
It steam in winter like an ox's breath,
Until the bushes all along its banks

Are inch-deep with the frosty spines and bristles—
You know the kind. Then let the sun shine on it! (lines 48-54)

ここで老人は川沿いの茂みについた水蒸気が凍って朝日に煌めく様子を語る。これは遠く離れた視点からは見ることでできない人間の目線にある現象であり、日常生活の中で老人が見つけた自然の美しさだ。“bushes” “banks” “bristles” “ox’s breath” といった単語がbの音の連続で軽やかなリズムを生みつつ、老人にとって身近な動植物に関する言葉が風景の美しさを表現している。山頂からの風景を神や天と結び付けて賛美する「崇高」なホワイトマウンテンズの詩とは対照的な、老人の日常言語と生活から生まれた風景描写だ。しかし“a view around the world” (55) を求める語り手は、老人の語る川辺の光景に関心を示すことはない。

山頂からの眺望を求める語り手は、一見ガイドブックに従う典型的な旅行者だ。しかしルネンバークを訪れながら、ホワイトマウンテンズではなくホー山に惹かれ、その様相を詩やガイドブックの引用ではなく自分の言葉で語るという点において、従来の観光客とは異なる姿を見せている。例えば作品の冒頭、語り手は自身を魅了するホー山を以下のように語る。

The mountain held the town as in a shadow.
I saw so much before I slept there once:
I noticed that I missed stars in the west,
Where its black body cut into the sky.
Near me it seemed: I felt it like a wall
Behind which I was sheltered from a wind. (lines 1-6)

ここでは“T”を主語とした文章が連続し、語り手は自分が「見た」(“I saw”)「気づいた」(“I noticed”)「感じた」(“I felt”)山の様子を語る。ガイドブックで引用される詩では作品の中心にあるのは山であり、その崇高さを言葉で表すことは不可能だと言うが、それとは対照的に、ここで軸となるのは語り手の感覚だ。語り手は自分が知覚した山をまるでそのまま言葉にするかのように、山を自分との関係性の中で描き出し、山の巨大さを表現することを不可能とは感じない。

次の詩行においても、語り手は自分が「見た」山の様子を語る。

... I saw through leafy screens
Great granite terraces in sun and shadow,
Shelves one could rest a knee on getting up—
With depths behind him sheer a hundred feet.
Or turn and sit on and look out and down,
With little ferns in crevices at his elbow. (lines 57-62)

ここで語り手は、山を登る感覚やその際に見えるであろうシダの有様を、“knee”や“elbow”といった自分の身体と関連づけて述べる。山を身体感覚と共に描写することで、語り手は観光産業の中で

「崇高」として概念化された山に物質性を回復させている。人間の身体と触れ合う日常生活の次元へと自然を引き戻しているのだ。

語り手はホー山の登山経験なしに、視覚情報を身体感覚へと繋ぐことのできる想像力を持つ一方で、老人が語る光景、つまり聴覚を通した言語のみの情報を視覚情報へと変換することができない。これは語り手の限界でもある。しかし自らの観察に基づき、自らの言葉で、自らの身体感覚と結びつけて語るができるという点で、語り手は当時の典型的な観光客とは異なっている。語り手は自然を崇高の概念としてではなく物質として認識し、自分の語彙を用いて表現することで、自然と旅行者と文学の新しい関係を築きつつあるのだ。

・“A Fountain, a Bottle, a Donkey’s Ears and Some Books”

“A Fountain, a Bottle, a Donkey’s Ears and Some Books” はホワイトマウンテンズを訪れた語り手とガイド役の地元の老人の交流を描く。ガイドの老人は観光客に評判の景勝地へと、旅行者である語り手を連れて行こうとする。

老人が語り手に提案する観光地は、自身が所有する“a solid mica mountain” (1) や植物が崖に茂って“a bottle” (38) のように見える場所、ロバの耳のように見える山並み (“The two converging slides, the avalanches, / On Marshall, look like donkey’s ears” (52-53)) といった自然だ。これらは岩壁が老人の横顔のように見える“Old Man of the Mountain” や岩肌が象の頭部のように見える“Elephant’s Head” など実際のホワイトマウンテンズの観光地を思わせる⁷⁾。しかし巨大で重々しい印象を与える“Old Man” や“Elephant” に比べると、作品中の“a bottle” や“donkey’s ears” はどこか滑稽で、現実の観光地がこの作品ではパロディ化されている。

これらの観光地をガイドの老人が薦める一方で、語り手は、やはり観光客に人気だった歴史遺構を思わせる“The early Mormons” (9) の“a stone baptismal font” (10) を見たいと主張し、パロディ化された観光地には見向きもしない。そこで老人はある廃屋へと語り手を連れて行く。そこは“Clara Robinson” (77) という詩人が暮らした家で、屋根裏には生前ロビンソンが出版したものの、売れずに返送された詩集が山となっていた。屋根裏に入り込んだ2人はそれぞれ詩集を手に取り読み始め、その後語り手は満足して帰路に着く。老人と語り手は景勝地よりもロビンソンの詩集に価値を見出したが、ロビンソンが書いた詩はホワイトマウンテンズの伝統的な芸術からはかけ離れている。老人はロビンソンの詩を以下のように説明する。

... It [Robinson’s book] was all about
 The posies on her inner window sill,
 And the birds on her outer window sill,
 And how she tended both, or had them tended:
 She never tended anything herself.
 She was “shut in” for life. She lived her whole
 Life long in bed, and wrote her things in bed.
 I’ll show you how she had her sills extended
 To entertain the birds and hold the flowers. (lines 79-87)

ホワイトマウンテンズを舞台にした詩が伝統的に、山頂から見下ろした雄大な自然をいかに讃えるかという点を重視したのに対し、ロビンソンの詩は同じホワイトマウンテンズの山中にありながら、家の中から日常的に眺めた窓辺の風景を描いた。観光地の崇高な風景が旅行者を「楽しませる」ものとして消費されたのに対して、「鳥たち」を「楽しませる」(“to entertain the birds”)過程で生まれたのがロビンソンの詩だった。語り手は観光客に人気の“the famous Bottle” (42)を“it's empty” (43)と述べて否定した一方、ロビンソンの詩集を“overflowing like a horn of plenty / Or like the poetess's heart of love” (94-95)という詩行で、野菜や果物が溢れ出す「豊穡の角」のイメージと重ねる。自然を概念化して消費する観光詩には欠ける喜びのあり様、すなわち自然に親しみ、与えるという豊穡さを、語り手はロビンソンが書いた窓辺の詩に見出したのである。

旅行者が崇高な風景を享受し、詩がその宣伝役でありガイドでもあったホワイトマウンテンズという場所で、ロビンソンの詩はその役割を完全に放棄している。ロビンソンは観光地化を通じて非日常化した自然を、窓辺の日常の風景として再定義した。旅行者である語り手と地元ガイドの老人はロビンソンの詩に価値を認めたが、二人のこの行動は、ホワイトマウンテンズにおける自然の描き方について再考を促す。そして崇高な自然ではなく日常生活の中にある自然を重要視するフロストの姿勢を示しているのである。

・“Stopping by Woods on a Snowy Evening”

“Stopping by Woods on a Snowy Evening”は、日本でも紹介されることの多いフロストの代表作の一つだ。この作品でフロストは、観光地の崇高な自然ではなく日常生活の中でこそ見出される自然の美しさを描き出した。

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.
The only other sound's the sweep
Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark and deep,
But I have promises to keep,

And miles to go before I sleep,
And miles to go before I sleep.

非常に精密な脚韻構成と韻律を持つ伝統的な形式を用いつつも、本作はガイドブックにあるようなロマン派的自然——峻巖な岩山や山頂からの風景——ではなく、より身近な夜の森の雪景色を紡ぎ出す。この森は第1連で語り手が思いをはせる通り、村に住む知り合いの所有地である。1914年に国有林の指定を受けたホワイトマウンテンズとは対照的に、この作品の森は人間の保護を受ける自然環境ではなく、人間が所有し利用する生活の一部としての自然だ⁸⁾。また第2、3連で言及される「馬」の存在は語り手の労働を示唆し、語り手が日常生活の途中であることを語り手だけではなく読者にも思い出させ、第4連の“promises to keep”という言葉からは語り手が属する人間社会の繋がりが垣間見える。さらに最後2行“And miles to go before I sleep”の繰り返しでは、「眠り」が「雪」との連想で「死」を思わせることで哲学的な深みを生みつつ、語り手の決意や活動をあくまでも生活サイクルの中に置いている。そしてガイドブックの詩が言葉を尽くして自然の崇高さを表現し、同時に表現不可能なことを嘆いたこととは対照的に、この作品で森の美しさを述べるのは“The woods are lovely, dark and deep”のただ1行だ。その1行においても、夜の森を表すのに“dark and deep”、語り手の景色に対する感想を表すのに“lovely”という平易な単語のみが使用され、宗教的な語彙を借りることはない。ここにあるのは崇高な自然が想起させる畏怖の念ではなく、日常に常に存在する自然が突然語り手を魅了した瞬間である。語り手の労働や人間関係を示す言葉が詩行のほとんどを占めるからこそ、日常生活を送る語り手の意識に、自然の美しさが突如浮かび上がった様が効果的に表現されているのだ。

フロストはこの作品で、崇高な自然ではなく身近な領域にある自然の風景を、地域の人間関係および語り手の日常生活と併せて描き出し、日常から芸術が生み出されることを証明した。「崇高な風景」という観光地の伝統が根付くニューハンプシャーに、新たな自然描写の方法を提示したのである。

4. 結 び

ニューイングランド北部は、避暑地として魅力的な海岸地域や山岳地域といった自然環境、豊富な歴史遺産、交通網の発展に恵まれ、政策の後押しを受けたことで観光地として発展することになった。小説の題材を求めてホワイトマウンテンズを訪れたホーソーンは、当地を舞台として“The Great Stone Face” “The Ambitious Guest” “The Great Carbuncle” の3編の短編小説を書いた。それぞれこの地域の有名な景色、土砂崩落事故、伝説を土台としたこれらの小説において、ホワイトマウンテンズは魅力的な作品舞台として完成したが、その中で素朴な地元住人は自然とそれにまつわる伝説に翻弄され、神秘的な自然の引き立て役に収まっている。また Henry James は *The American Scene* において “the New Hampshire mountains” を “the particular rich region” (367) と賛美したが、そこに暮らす人々については “poor and bare” (374) であると観察する。一方で、ニューイングランド地域小説として評価の高い Sarah Orne Jewett の *The Country of the Pointed Firs* の語り手は、地域の自然・歴史・産業に基づいた地元のコミュニティと旅行者との関わりを

前景化する。このようにニューイングランド北部は観光客と地元住人、つまり外部と内部双方の視点から描かれてきた。その中でホーソンやジェイムズら旅行者はニューハンプシャーの崇高な自然と典型的な地元住人を描き、やがてジュエットやフロストが自然と日常生活、旅行者と住人とを接続することになる。

崇高な自然を求めて人々がやってくる観光地を地元の人々の暮らしとともに描くことで、フロストは日常生活にある自然の美しさを表現した。ジュエットが地元住人の生活を郷愁と共に物語化したのとは異なり、フロストが書いたのはのどかな田園風景だけではない。本稿では紹介しきれなかったが、「貧しくむきだし」とジェイムズが形容した地元の人々の生活を、フロストは共感をもって綴った。そういった状況もまた、住民の日常であった。フロストは旅行者の視点から形作られてきたニューイングランドを、日常生活から垣間見える自然と人々の暮らしと共に描き直したのだ。

注

- 1) Robert Frost Place のウェブサイトによると、フロストは1915年から1920年までフランコニアで暮らし、その後も夏にはフランコニアを訪れていた。<https://frostplace.org/index.php/about-us/>
- 2) Old Home Week については Dona Brown の *Inventing New England*、第5章を参照。
- 3) ホワイトマウンテンズ観光の歴史と詩の関係については、*Inventing New England* の第2章で詳しく分析されている。
- 4) *Inventing New England*、第2章を参照。
- 5) 本稿では1871年版の復刻版を参照。
- 6) Pavel Cenkl が *This Vast Book of Nature* の第2章で、ホワイトマウンテンズのガイドブックで地元住人が周縁化されている点を指摘している。(p. 41, p. 51)
- 7) Atkinson News 社発行のポストカードセット“Scenic Folder of the White Mountains N.H.”、1923年の消印が押されたものを参照。“Old Man of the Mountain, Franconia Notch”と“Elephant’s Head and Entrance to Crawford Notch”の他、“The Basin, Franconia Notch”など観光地の絵が蛇腹折りになっている。
- 8) ホワイトマウンテンズの国有林化については National Forest Foundation のウェブサイトを参照。<https://www.nationalforests.org/our-forests/find-a-forest/white-mountain-national-forest>

Works Cited

- Brown, Dona. *Inventing New England: Regional Tourism in the Nineteenth Century*. Smithsonian Institution, 1995.
- Cenkl, Pavel. *This Vast Book of Nature: Writing the Landscape of New Hampshire’s White Mountains, 1784–1911*. U of Iowa P, 2006.
- Farland, Maria. “Modernist Versions of Pastoral: Poetic Inspiration, Scientific Expertise, and the ‘Degenerate’ Farmer.” *American Literary History*, vol. 19, no. 4, 2007, pp. 905–36.
- Frost, Robert. *Collected Poems, Prose & Plays*. Edited by Richard Poirier and Mark Richardson, Library of America, 1995.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Great Stone Face and Other Tales of the White Mountains*. Waking Lion, 2006.
- James, Henry. *Collected Travel Writings: Great Britain and America*. Edited by Richard Howard, Library of America, 1993.
- Jewett, Sarah Orne. *Novels and Stories*. Edited by Michael Davitt Bell, Library of America, 1994.
- Kemp, John C. *Robert Frost and New England: The Poet As Regionalist*. Princeton UP, 1979.
- King, Thomas Starr. *The White Hills: Their Legends, Landscape, and Poetry*. Forgotten Books, 2015.
- MacArthur, Marit J. *The American Landscape in the Poetry of Frost, Bishop, and Ashbery: The House Abandoned*. Palgrave, 2008.
- Monteiro, George. *Robert Frost and the New England Renaissance*. UP of Kentucky, 1988.
- New, Elisa. *New England Beyond Criticism: In Defense of America’s First Literature*. Wiley, 2014.

Nutting, Wallace. *New Hampshire Beautiful*. Old America Company, 1923.

Paton, Priscilla. *Abandoned New England: Landscape in the Works of Homer, Frost, Hopper, Wyeth, and Bishop*.
UP of New England, 2003.

Sargent, Porter E. *A Handbook of New England: An Annual Publication*. Ellis, 1921.

(立教大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学)

Non-Sublime Scenery of the White Mountains: Robert Frost and Nature Poetry in Tourism

by

Sayaka Asakura

Robert Frost is widely recognized as a “New England poet” and is studied in relation to New England literary tradition. The definition of “New England” literature, however, is ambiguous; this historical and cultural icon of the United States in fact comprises divergent local communities and social strata. In the past two decades, scholars such as Maria Farland and Priscilla Paton have examined a more specific area and time of New England. Building on this recent scholarship, I reconsider the Romantic aspect of Frost’s poems through the lens of the tourism industry of the White Mountains of New Hampshire.

The White Mountains were developed as a tourist destination starting in the 1830s due to their “sublime” and “picturesque” sceneries. Tourists visited scenic places with mountain vistas and recited or wrote poems that expressed their awe. To support this activity, guidebooks contained citations from Romantic poetry that manipulated elaborate words and religious terms to delineate sceneries. These poems rarely mention local people whereas Frost depicts both the locals and travelers of the White Mountains.

In “The Mountain” and “A Fountain, a Bottle, a Donkey’s Ears and Some Books,” Frost portrays the conversations between untraditional travelers and the locals of the White Mountains. The interactions reveal an attractive natural scenery that is found in local daily life and the potential of poetry that illustrates non-sublime nature with simple vocabulary. “Stopping by Woods on a Snowy Evening” is a prime example of using colloquial words to exhibit beautiful nature in daily life.

Many authors and poets have written of New England tourist destinations. While Nathaniel Hawthorne and Henry James depict beautiful tourist locations and stereotypical local people, Sarah Orne Jewett and Frost connect tourists with local lives. Through his unromantic poetry of non-sublime nature, Frost reorients the poetics of the White Mountains.